denamen."

以上をもつて、六日に渉つた第七回常設国際アルタイ学会は全日程を終了したのである。

第一回「若手アルタイ学者の集り」

山田信夫

去る八月末より九月はじめにかけて、オランダに於いて開催された国際アルタイ学会議（PIAC）のことは、岡田英弘氏の通信にみられるとおりである。そのなかで、同会議の決議事項の一つに、「このほど結成された日本アルタイ学会への祝賀」ということがあるが、その、「日本アルタイ学会」と称されたものについて、このさい、発起人の一人として一文を筆するようにとの、編集委員よりの申し出があつた。

まず、岡田氏の通信に用いられている「日本アルタイ学会」という称呼であるが、PIACの席上、どのような表現が用いられたか不明にしろ、われわれの間では、「学会」という表現は、少くとも現在の主旨からは不当であるとして用いていなかつたし、英文ではmeeting と称したものである。この「名称」のことについては、又のちにふれよう。

その集りは、七月一〇日夕刻より、一四日朝まで四泊五日、長野県野尻湖畔、野尻湖ホテルを会場とし、三三名参集した。集りの発起人として名をつらねたのは以下の五名である。萩原淳平（京大）池上二良（北大）、神田信夫（明大）、護　雅夫（東大）、山田信夫（阪大）。その主旨は、いわゆるアルタイ学、あるいは、内陸アジアまたは最近提唱されているmiddle Eurasia などという地域の民族・文化・歴史に関心を寄せるものが、専攻分野の枠を越えて大いに討議し交歓しようということであつた。そのさい、筆者など、外国のアルタイ学という学問分野、その最近の状勢と、それに対応すべき日本に於ける学界の現状、要するに、欧米・ソ連その他の諸外国で、アルタイ学とよばれるものが言語研究より出発し、今や言語研究だけではだめで、考古・歴史学、人類学などの成果と併せ進むべきだとの風潮が高まつているのに対し、日本では、歴史研究に最も層が厚く、その他の分野、とくに国際的にも高い水準にある言語学分野との連絡が極度に乏しいという現状、そのような点について意識していたことは事実である。そして、曽て参加したことのあるPIACのやり方が念頭にあつたことも事実である。日程は次のとおりであつた。

七月一〇日夕刻参集　七・〇〇—八・三〇〔会食、ズケジュール打ち合わせ〕八・三〇—一〇・〇〇〔スライド・旅行談（1）〕「アラブ・ヨーロッパ」前島信次・島崎　昌

七月一一日　九・三〇—一二・三〇〔Confessions（1）〕后三・〇〇—四・三〇〔Confessions（2）、メッセージ〕、四・三〇—六・〇〇〔報告（1）〕「比較アルタイ語学」村山七郎・小沢重男、八・三〇—一〇・〇〇〔スライド・旅行談（2）〕「モン

ゴル・トルコ」坂本是忠・護　雅夫

七月一二日　九・三〇—后一・〇〇〔報告（2）〕「ドイツのTurfan 文書」島崎　昌、「モンゴルに於ける歴史論争」坂本是忠、「韓国の諸大学と資料保存の現況」島田正郎、后二・三〇—三・三〇〔野尻湖周遊〕三・三〇—七・〇〇〔江上波夫氏招待パーティ（於水田水別邸）〕八・三〇—一〇・〇〇〔自由討議〕

七月一三日　九・三〇—后一・〇〇〔報告（3）〕「ソ連に於ける蒙古研究の近況とその資料について」田山　茂、「日本に於けるチベット研究史」佐藤　長、「社会人類学からみたチベット社会」中根千枝、后三・三〇—六・三〇〔報告（4）〕「近世内陸アジア研究の今后の課題、（附）ソ連邦での北狄伝研究」佐口　透、「欧米に於ける満洲語文献」神田信夫、八・〇〇—九・三〇〔スライド・旅行談（3）〕「台湾・ヨーロッパ」松村　潤・神田信夫

七月一四日　朝食后解散

なお、予定されていて省略された報告には次のようなものがあつた。池上二良「アルタイ語学をめぐつて」、中田吉信「オーストラリアの東洋学」、梅棹忠夫「人類学の対象としての内陸アジア」、護　雅夫「トルコの学界」「北アジア史の時代区分」、山田信夫「アメリカのアルタイ学」「日本に於ける蒙古・中央アジア研究史」、神田信夫、池上二良「日本に於ける満洲・ツングース研究史」

最初の Confessions は、お互い名は知つていたが顔を見るのははじめてという人も少なくなく、旧知のものでも改めて確認したというような private history から、現在の、あるいは今后の仕事について、またその周辺でやつていることなど、全員が述べたもので、時間が不十分であつたと、のちに批判をうけたほどであつた。たしかに、時間は全体に不足であつたかもしれない。各報告に関連して討論が活潑化したことも、ふつうの学会ではみられなかつたほどであり、熱心なものは、集会后の自由時間、私室内、ロビー、あるいは散歩を誘い合つて続けられていた。

言語学関係として、急病で不参加となつた池上氏を欠いたが、村山・小沢両氏が、人類学関係で、中根氏が報告されたことは、参会者の多くを占めた歴史学畑のものにとつては、あらためて隣接科学の体系の一端を示されたものとして、少からぬ感銘を与えたようだつたし、一方文献史畑のものの報告・発言は、とくに、その歴史文献に対する厳密な史料批判態度という点で、歴史学以外の人には印象ずけられたようである。島崎・神田の両氏は、ともに一年間の在外研究を了えて帰国されたばかりのところで、その成果を発表された。別に、詳細な記録は文章として近く発表されるだろう。

韓国の学界・資料の状況については島田正郎氏が、モンゴルについて坂本氏が報告されたが、坂本氏は、夜、スライドを見せられたのとは別に、彼地の歴史学界に於けるチンギスカン論争、奴隷制議論も紹介・批判された。ソ連については、蒙古研究にしぼつてであるが、田山氏が、その情報入手の手のうちを、予め作製されたソ連刊行の文献目録類のリストと共に示された。

そもそも、今回は、報告事項として二つの大きなテーマを考えていて、その一つが、「外国に於ける研究と資料」と題されていたが、以上の諸報告はその線に沿うものである。他に、オーストラリア、トルコ、台湾、アメリカについても、中田・護・松村の諸氏に筆者が報告を予定していたが、中田氏は病気欠席により省略、護・松村両氏は、スライド映写に併せた解説としてその一端にはふれられたが、筆者のと共に時間のため省略した。

このような集りが、一種の情報交換の役を果たすことはたしかに期待し得ることの一つであるが、こう並べてみると、最近、これほど多数のものが海外各地に出かけていたかを、また、それだけに斯学の国際的交流が可能と同時に必要であることが改めて認識されたものである。

このテーマと並び、もう一つ掲げていたのが「日本に於ける研究史」というものであったが、この多くは省略し、ただ、佐藤氏のチベット関係だけが報告されたが、佐藤氏が、そのはじめの一頁に、榎本武揚の名をあげたことは興味深かったし、それ以降の学史的まとめ方は、聞き放しするには惜しいようなものである。

ほぼ終りに当り、佐口氏の報告されたところは、問題提起でもあり、そもそも、もう一日多く組んであった日程が短縮されたため、関連した討論はきわめて不満足のまま終ったが、同氏得意の図表を伴った報告は、問題の所在も、主張されることも判り易く、大きな関心をよんだと思う。

以上のような諸報告のあった正式の集会は三階の展望室とよばれる、船橋様に三方がガラス張り、眺望絶佳の室を会場としていたが、眼下にひろがる野尻湖周遊を一二日午后は行った。一時間のボート遊覧ののち対岸に上陸、江上波夫氏招待のガーデン・パーティに全員が招かれた。江上氏、また植村清二・前嶋信次両氏などの懐故談を中心に、研究集会の席とは別の談論風発の三時間を過ごしたが、同夜の夕食后は、自由討議の時間に当てた。その席上、企ての発端について問われ、神田氏が発起人を代表して答えたが、前にも私見として記したこと以外、発起人一同が同年であり、そもそもクラス会的意図にはじまったものが、より若手のもの、若干の先輩もふくめて、若手アルタイ学者ということになったこと、発起人の先生クラスに相当する方たちも決して敬遠するものではないことなどを説明。用いられた「大先生がた」という表現に対し、「大・中・小区別なし」も提案され、さらに、今回の運営方針「気らくさ」を失わぬこと、そして集りの呼び名についていろいろ提案されるところがあった。ただ司会に当った筆者の怠慢であったかもしれぬが、けっきよく結論は出さぬままである。ただ、その后、「野尻湖クリルタイ」という表現が一部のものの間で通称化したこと、また、集会中にみんなでしたためた外国の知人宛の寄せ書きの一部で、Junior Altaists meeting in Japan と記されたものもあったことなどは事実である。

とにかく、このように名無しのままで終ったこと、スケジュールも第一夜参加者の揃ったところで確定しようとしたこと、予定され

た報告も事のいきおいで適宜省略したことなどにみられるような雰囲気で、この集りははじまり、おわったのであったが、いつまでもこのままではすまぬかもしれないにしても、いわゆる学会とは別にこのようなかたちのものがあっても良かろうとは思う。

今回は六月一五日附ではじめて案内状を発送したような次第で、主旨には絶大な賛成を示されながらも参加できなかった方も少なくなかった。また、参加者も、次々に聞き伝いで拡がっていったという面もあり、必ずしも十分計画的ではなかった。外国人としては留学中のソウル大学の崔鶴根氏が参加されたし、他にも希望された方があった。今后、少くとも近隣諸国の友人諸君は、早く連絡さえしておけば進んで参加するだろうと思う。岡田氏の通信によれば、PIACも日本で開催したいという希望が強い由で、それは十分考えられるような、昨今の、世界の状勢だと思う。日本のアルタイ学に対する期待は確かに強いものがあり、少くとも高い水準の言語学、深い層の歴史学など十分その期待にこたえ得るはずのものであり、そのさい、日本の学界内部で、平常から専攻分野の壁を越えた連繋が緊密であることが望まれるわけである。今回の集りは、前に記したようにクラス会的なものにはじまっているが、改めて、それぞれの方面で指導的立場にある先生方が、より組織的なものを考えていただければ、国内に於いても、われわれのみならず、新しく輩出しつつあるより若い研究者に益すること甚大なものがあろうし、そのような外国からの期待にこたえるにも好都合であること疑いない。

正誤表（第四十七巻　第二号）

「高麗時代の郷職」　武田幸男

頁	行	誤	正
169	4	授二中尹一	授二中尹一
169	13	官職・官職・散階	官職・散階
170	表	州史府史郡史県史 3 兵史倉史 2 副客舎正副薬店正副司獄正 准	州史府史郡史県史 3 兵史倉史 2 副客舎正副薬店正副司獄正 准
172	13	衆知のように	周知のように
173	6	郷品九品	郷職九品
182	1	田紫科	田柴科
195	8	ものと思う。(32)	与えたのだが、(32)
202	下7	衆知の通り	周知の通り
204	上6	末松保・西嶋定生両和先生	末松保和・西嶋定生両先生